

## デューイ・スクールの真実

—シカゴ大学実験学校はどのような学校だったのか—

小 柳 正 司

(1998年10月15日 受理)

### The Realities of the Dewey School

—For the True Knowledge about It—

Masashi KOYANAGI

#### 1. はじめに

1896年1月、デューイはシカゴ大学に「実験学校」(Laboratory School)を開設し、教育革新のための理論と実践の開発に取り組んだ。この実験学校で試みられたユニークな教育活動の具体的な様子やその成果は、彼の著書『学校と社会』<sup>1)</sup>の論述を通して、アメリカ国内はもとより、広く諸外国にも紹介され、そのためシカゴ大学実験学校は20世紀前半に国際的に沸き上がる新教育運動の先駆的学校として、教育史上高い位置づけを与えられている。このことは一般によく知られている。

しかし、そうした歴史的評価の高さとはうらはらに、シカゴ大学実験学校が実際にどのような学校であったのか、その実態については意外に多くのことが知られていない。

第1に、この実験学校は、デューイ自身が「大学附属小学校」(The University Elementary School)という呼称を使ったこともあって、一般には「小学校」だと思われているが、実態はそれほど単純ではなかった。この実験学校に在籍した子どもたちの年齢は、最終的には下は4歳から上は14-15歳にまでわたっていた。つまり、この学校は幼児教育の段階から初等教育、さらには中等教育の一部までを含んでおり、上級学年では大学進学準備のために初歩的なラテン語の教育すら行われていたのである。シカゴ大学実験学校を純然たる「小学校」と見なし、したがってデューイの教育実験は初等教育の段階に限定されたものであったと考えることは、実験学校の実態からかけ離れた俗説だと言っても過言ではない。

第2に、シカゴ大学実験学校は、往々にしてアメリカの進歩主義教育運動(The Progressive Education Movements)と重ね合わせられ、いわゆる児童中心の教育実践を先導した新学校のように考えられているが、シカゴ大学実験学校についてこれほど実態からかけ離れている誤解はない。確かに、この学校では既成の教科書は用いられず、伝統的な教科の区分も廃止されて、知識の習得は何よりも子どもたちの直接経験や活動的作業にともなっていくものとして行われていた。だが、こ

の学校は、子どもたちが思い思いに好きな遊びや活動をしていればそれがそのまま学習だとするような牧歌的な児童中心学校ではなかった。そこでは、子どもたちに何をどこまで学習させるかという教育目標の明確な設定があり、それに即した教材・教具の綿密な開発と、さらには科学の系統性に立脚した教科課程 (course of study) の編成がデューイの指導のもとにその教師たちによって念入りに行われていた。

第3に、われわれは『学校と社会』をはじめとして、デューイが実験学校に関して記したいくつもの論述を通して、実験学校のおよその姿をイメージしているが、そこにも一つの陥穽がある。すなわち、その場合、実験学校で実際に教育活動の任に当たり、日々生じる実践上の諸課題に直接対処したのはこの学校の教師たちであって、デューイではなかったという事実が忘れられがちである。デューイはあくまでも理論家であり、彼が著書や論文で書いていることがそのまま実験学校で行われていたと考えることは早計である。彼が著述という形で示したものは、実験学校の教育活動が全体として依拠すべき理念や原理であり、あるいは実践上の諸成果をそのような理念や原理に照らして整合的に意味づけたものである。実験学校の実態とデューイの著述内容との間には、当然のことながらある程度の齟齬がある。実験学校も一つの学校であり、それ自体が生きた教育実践の現場であったかぎり、その学校がデューイの著述から浮かび上がるような「すばらしい学校」として存在していたはずはなく、そこにはいくつもの失敗や未解決の問題があって、そのつど教師たちの真剣な努力が払われていたはずである。その意味で、実験学校が実際にどのような学校として存在していたかを、実験学校の実態を記録した資料によって改めて明らかにする必要がある。

さらに第4に、「実験学校」という名称から、この学校はあたかもデューイが自らの教育理論をここで実地に移してみても、その結果に基づいて理論を検証したり修正したりする場所だったと思われがちであるが、これも実験学校の実態からかけ離れた一種の俗説だと言わなければならない。この点についてはデューイ自身が次のように述べている。

世間一般では、わたしがこの学校で実地に移されるべき出来合いの原理や観念の創作者であったと思われる。しかし、学校の管理とともに教育上の指導も、また実際の授業とともに教育内容の選択や教科課程の作成も、ほとんどすべては当校の教師たちの手になるものであり、それらに含まれている教育の原理や方法は与えられた装置ではなく、実践の積み重ねの中から次第に発展してきたものである。教師たちは、与えられた原理や理論から出発したのではなく、自分たちが気づいた疑問から出発したのであり、そこから何らかの解答が得られたとすれば、それを提供したのはどんなものであれ、当校の教師たちなのである。<sup>2)</sup>

この学校が教育の「実験室」であったのは、単にデューイの教育理論を実地に試すという狭い意味においてではなくて、むしろデューイを主任とするシカゴ大学教育学科 (Department of Pedagogy) の実験室という広い意味においてであった。つまり、この学校は、その教師たちを含む教育学科のあらゆる構成員がそれぞれに教育研究を進めるうえで利用する実験室だったのであ

り、この学校はシカゴ大学教育学科がデューイを中心とする一種の研究共同体として醸し出している実験的な研究態度や精神に支えられ、またそれを支えているという意味で、「実験学校」と呼ばれたのである。(ちなみに、この実験学校ではデューイは校長ではなく、あくまでもディレクターと呼ばれていた。それは、教育学科の主任教授として実験学校を全体として統括している責任者というくらいの意味であった。)

以上の他にも、シカゴ大学実験学校については、その実態からかけ離れた誤解や俗説がいくつかある。例えば、この学校にはいつも見学者が絶えなかったが、それでもこの学校をモデルにして造られた新学校は、諸外国はもとより、アメリカ国内においても一校もないのである。この実験学校は、いかなる意味においても他の学校のモデルや模範になるような学校ではなかった。シカゴ大学実験学校がしいて何かのモデルになるとしたら、それは教員養成とは区別される大学における教育学研究の在り方を示すモデルとなることであつた。ところが、往々にしてそれはあたかもデューイの教育理論を忠実にデモンストレーションして見せるためのモデル・スクールのように考えられている。これは、シカゴ大学実験学校に対する大きな誤解であるばかりでなく、そもそもデューイが実験学校を開設するに至った意図の無視、ひいてはデューイの教育理論に対する正当な評価への妨げとなるものである。

以下では、まずシカゴ大学実験学校の概略を示した後、一つの参観記を手掛かりにこの学校の実態と基本的性格に関して、これまでの一般的な通念との違いを鮮明にし、最後に従来まではほとんど指摘されることのなかったこの実験学校のねらいを明らかにすることにした。

## 2. 概 略

### 57番街389番地からキンバーク街5718番地へ

1896年1月、デューイはシカゴ大学教育学科 (Department of Pedagogy) に小さな学校を開設した。正式名称は「大学附属小学校」(The University Elementary School) といったが、一般には「デューイ・スクール」とか「実験学校」とかと呼ばれた。<sup>3)</sup> シカゴ大学のキャンパスから少し離れた57番街389番地 (389 57th Street) に一軒の住宅を借り、6才から9才までの生徒16人に教師1人でその学校ははじまった。教師にはクララ・ミッチェル (Miss Clara I. Mitchell) という女性が採用された。彼女は、フランシス・パーカー (Francis Wayland Parker) が校長を務めるクック郡師範学校 (Cook County Normal School) の卒業生で、そこの実習校 (practice school) で教師をしていた人物である。その後まもなくして、教育学科の大学院学生スメドレイ (Mr. F. W. Smedley) が手工 (manual training) の指導員として加わった。<sup>4)</sup>

開校初日の様子を『シカゴ大学週報』(University of Chicago Weekly) の記事は次のように伝えている。

教育学科に付設された小学校が月曜日の朝開校した。出席した子どもは12人。その2倍の数の父母と参観者が見もった。57番街389番地の建物は新しい住宅で、窓は大きく部屋は明るく、まわりに空き地がある。午前の最初の授業は歌で始まり、それから建物と敷地を見てまわり、子どもたちの観察力を試すとともに、庭や台所などについて彼らの知識を確かめた。子どもたちはそれからテーブルにつき、ボール紙をわたされた。午前の終わりには鉛筆その他のものを入れる紙箱を全員が作り終えた。子どもの一人がお話をして、それから体操をおこなって日課を終了した。子どもたちの身体教育については、[シカゴ大学の]女子体育科の主任(Director)であるアンダーソン嬢(Miss Anderson)がうけもっている。<sup>5)</sup>

後にデューイ・スクールについて詳細な記録をまとめたメイヒューとエドワーズによれば、最初の6カ月は「試行錯誤の期間」であり、主として「何をなすべきでないか」が明らかにされた時期であった。<sup>6)</sup> 年度途中からの開校ということで、いわば予行の段階にすぎなかったということであろう。資金の不足もあって学校はいったん閉じられ、新たに同年(1896年)10月、新年度の開始にあわせて、大学のキャンパスにほど近いキンバーク街5718番地(5718 Kimbark Avenue)にやはり一軒の住宅を借りて学校は再開された。<sup>7)</sup>

生徒数は6才から11才までの32名に増加した。教師はクララ・ミッチェルと手工指導員のスメドレイに加えて新たにキャサリン・キャンプ(Miss Katherine Camp)が採用され、ミッチェルが主として文学と歴史を、キャンプが理科(science)と家庭科(domestic arts)を担当することになった。これら常勤の3名のほかにパートタイムの音楽指導員が1名、さらに教育学科の大学院学生3名がアシスタントとして確保されて、スタッフの陣容はかなり充実した。<sup>8)</sup> そして、デューイの指導のもとに本格的に教育実験が開始され、その記録は毎週金曜日に発行されるシカゴ大学の『大学広報』(University Record)に定期的に掲載されていった。<sup>9)</sup>

### ロサリー・コート

しかし、このキンバーク街の住宅は手狭だったため、より大きな建物を求めて、早くも同年(1896年)12月のクリスマス休暇に学校は57番街とロサリー・コートの角(57th Street & Rosalie Court)に建つ旧サウス・パーク・クラブ・ハウス(Old South Park Club House)に移転した。<sup>10)</sup> 1897年1月8日付けの『大学広報』に新しい移転先について次のように報告されている。

休暇中に大学附属小学校(University Primary School)がキンバーク街5714番地からロサリー・コートと57番街の南東角に建つ旧サウス・パーク・クラブ・ハウスに移転した。以前のところはとても手狭で、生徒たちは寿司詰め状態にあり、ものを取り扱ったり作業をしたりするのに不自由した。今度の建物は風通しと採光のよい5つの大きな部屋をもち、その他に作業室に使える地下室と、3階部分に広いホールがあって、ここは体操と遊戯の部屋に使う予定である。一階にある45人ほどが座れる大きな部屋は全体集会用の部屋(general assembly room)に使う予定である。二階の北側の大きな部屋は台所兼実験室とし

て、南側の小さな部屋は食堂として使う予定である。<sup>11)</sup>

移転の費用は父母の一部とデューイの教育実験に賛同する友人たちが工面した。新しい場所についてデューイは「ここには十分な広さ、快適な光と空気、そして体操室に使える大きなホールがある」と述べている。<sup>12)</sup>そして、より多くの生徒を受け入れることが可能となり、応募者の中から12名ほどが受け入れられた。生徒数は翌1897年5月の段階で46名と報告されている。<sup>13)</sup>

生徒数の増加にあわせて教師の数も増加した。教師のうちクララ・ミッチェル（文学、歴史担当）は1897年の春学期（4月開始）に辞職し、彼女の代わりにアーネスト・ムーア（Mr. Earnest C. Moor：コロンビア・カレッジ卒業）とチャーチル（Miss Churchill：スミス・カレッジ卒業）の2人が新たに採用された。さらに理科の補助員としてキャサリン・アンドリュース（Miss Katharine Andrews：スミス・カレッジ卒業）が採用された。<sup>14)</sup>カレッジ卒業者を小学校の教師に採用することは当時としては異例であり、かつ先進的なことであった。

1897年9月24日付けの『大学広報』に10月の新学期開始に向けた大学附属小学校の案内記事がある。そこにはこう記されている。

大学附属小学校は、57番街とロサリー・コートに建つ古い建物で10月1日午前9時から新学期を開始する。それまでの間、火曜日と木曜日の午前中、教師たちは学校に待機して、新入学者への対応をおこない、問い合わせにも答える。料金は、年少児で1学期（12週）15ドル、年長児で1学期20ドルである。

これまで子どもを通わせていた人、あるいは前年度に申込み手続をした人で、入学の予約を希望する人は早急にシカゴ大学のF.W.スメドレイ氏に知らせるように。9月28日までに知らせがない場合は、入学の希望がないものと見なされ、その結果生じた空席は新たな申込み者に振り向けられる。<sup>15)</sup>

### エリス街5412番地

生徒数は1897年10月の時点で60名となった。スタッフも大学院学生のアシスタント3名を入れて16名になった。<sup>16)</sup>その結果ロサリー・コートの建物も手狭になり、ここに移転してからわずか1年半後にはさらに広い建物を求めて、エリス街5412番地（5412 Ellis Avenue）の邸宅に移転することになった。大学のキャンパスからはやや遠くなったが、まわりには十分な空き地がひろがっていた。1898年6月17日付けの『大学広報』に掲載された移転を知らせる記事には次のように記されている。

シカゴ大学教育学科は、当学科が運営する小学校のためにエリス街5412番地に建つ大きな邸宅を3年間借りることができたことを、ここに喜んでお知らせする。自前の建物をもつまではずっとここに所在することになるだろう。この家は広々としていて、光のよく入る大きな部屋がいくつもあり、家の周囲に遊び場や菜園を十分確保することができる。家は屋根付きの通路によってレンガ造りの納屋とつながっており、

そこに工作室と体操室を設ける予定である。<sup>17)</sup>

レンガ造りの納屋は1階が体操室として、2階が工作室として使われた。母屋の大きな屋根裏部屋には美術の部屋と織物の部屋が設けられた。理科の実験室は3つあって、一つは物理用、一つは化学用、もう一つは生物用であった。歴史用の部屋は英語(国語)と共用で3室確保された。家庭科で使用する台所は2つの組(group)と一緒に使えるほどの広さがあった。食堂も2つあって、一つは昼食を持参した者のためのもの、もう一つはその日料理の授業をする組が使う「りっぱな」食堂("state" dining)で、ここには2つのダイニング・テーブルと皿の並んだサイドボードが1つあった。ここで子どもたちは授業の一環として給仕やテーブル・マナーを学んだ。さらに、母屋の入り口の2つの大きな部屋は4~5才児用として特別に確保された。<sup>18)</sup>このほか、以前からあった図書室と復唱室(recitation room)もあった。<sup>19)</sup>

こうしてデューイ・スクールは、1896年1月の発足以来2年半の間に3度の移転をくり返しながら、ここによくやく満足のいく場所を確保した。だが、このエリス街の邸宅も自前の建物と敷地をもつまでの仮住まいには違いなかった。<sup>20)</sup>

大きな建物を確保したことで、いままでよりさらに多くの子どもたちを受け入れることが可能になった。先の『大学広報』の記事は入学申込みに関して次のように記している。

申込みは受付順に受理されるが、各組(group)とも人数に制限があるので、最終的には子どもがこれまでに受けてきた訓練の程度にふさわしい組に空きがあるかどうかによって決まる。次年度に入学する子どもの場合、9月1日以前に辞退の連絡がないかぎり、第1学期の授業料は徴収される。現在新たに4才半から6才までの子どもを対象に2つの組を設けることが検討されている。この計画が確定すれば16名の子どもを受け入れることになる。これについても条件付きで申込みを受け付ける。詳しいことは7月31日までに申込んだすべての人に通知される。年少児は午前の授業だけで、授業料は学期ごとに15ドルである。1学校年は3学期制で、それぞれ10月1日、1月1日、4月1日に始まる。年長児は午前と午後に授業があり、授業料は学期ごとに20ドルである。<sup>21)</sup>

ここに記されているように、1898年10月の新年度からデューイ・スクールは4~5才児を対象に就学前教育の部門(sub-primary department)をはじめて開設した。デューイは当初から4~5才児の教育を考えていたが、資金不足のために実現できないでいた。しかし、この年ハワイのキャッスル家(Castle Family)から1,000ドルの大口寄付を得て実現にこぎ着けたのである。<sup>22)</sup>

1898年10月14日付けの『大学広報』の記事によれば、10月の新年度開始の時点で生徒数は4才から12才までの84名、教師は13名で、これに大学院学生のアシスタントが3名いた。<sup>23)</sup>さらに、1898-99年度の終わり(1899年6月末)までには生徒数は4才から12才までの95名となり、うち20名が就学前部門の4~5才児であった。大学院学生のアシスタントも7名に増えた。<sup>24)</sup>その後、生徒数は

1900年から1902年までの間に最大で140名にまで達し、教師も23名に、大学院学生のアシスタントも10名に増加した。<sup>25)</sup>

デューイ・スクールでは当初から教師たちの間におおまかな専門領域の区分があったが、エリス街への移転を契機に教師たちは部門 (department) ごとにチームを構成することになった。部門としては、歴史 (History)、理科 (Science)、家庭科 (Domestic Science)、手工 (Manual Training)、音楽 (Music)、美術 (Art)、体操 (Gymnasium) の7つが設けられ、そのほかに就学前の部門 (Sub-Primary Department) があった。学校がやがて中等の段階 (13才以降) にまで発展したときには言語 (Language) と数学 (Mathematics) の部門も独立することになっていた。<sup>26)</sup>

こうしてデューイ・スクールは、エリス街への移転を契機に新しい段階を迎えた。<sup>27)</sup> いわゆる「社会的オキュペーション」(social occupations)<sup>28)</sup>を核にしたデューイ・スクール独自の教科課程 (a course of study) が完成されるに至ったのも、まさにこの時期であった。学長宛の1898-99年度の報告書において、デューイは「今年度の教育上の主な課題は、教科課程に関するこれまでの3年間の諸成果を理論的に定式化することであった」と述べ、いくつかの点でまだ検討すべきことが残されているとしながらも「全体としては、当校がとってきた基本線はすばらしい成果をあげていることが見出されており、この方面での実験の期間は事実上終了したと思われる」と述べている。<sup>29)</sup> そして、自分たちの学校の特色ある実践として特に「織物」(textile)の作業を中心に据えた歴史 (産業史・発明史)の学習の成功に自信を示しながら、「糸をつむぎ、織機を制作し、布を織る等の織物作業 (textile work) は、既に全国の多くの進歩的な学校に導入されている」と指摘している<sup>30)</sup>。

同じ年次報告の中でデューイは「いまや当校は、これまでの諸成果を一般の教師たちに以前にもましてより直接的に役立つような形で出版できるところまで達している」と述べているが、<sup>31)</sup> 実際これは翌年 (1900年)の2月から12月にかけて9分冊の『小学校記録』(The Elementary School Record)としてシカゴ大学出版部から逐次刊行された。<sup>32)</sup> それまでもデューイ・スクールではそのときどきの実践報告をシカゴ大学が毎週金曜日に発行する『大学広報』に定期的に公開してきたが、この『小学校記録』では、他の一般の学校においても利用できるようにとの考えから、教育実践上の諸成果を理論的な諸問題を中心に各教科ごとにまとめている。

こうして、1899年はデューイ・スクールにとって一つの区切りの年となり、それまでの3年間におよぶ教育実験の成果を公式に世に問うことになった年となった。デューイ自身も、この年の2月には学校の父母会 (the Parents' Association)の会合で「大学附属小学校の3年間」と題する講演をおこない、それまでの教育実験をふり返って理論的に総括している。<sup>33)</sup> そして、4月には有名な『学校と社会』のもとになった3連続講演もおこなっている。<sup>34)</sup> そして、多くの人々はこの著書を通じてデューイ・スクールの理論と実践を知ることになる。

### 3. ある参観記から見たデューイ・スクールの実際

デューイ・スクールには当初からたくさんの参観者が訪れた。開校間もない頃にかかれたある文章の中で、デューイは「興味のある人はだれでも当学校 (the school community) の活動を参観できるようになっている。ただし9時15分から12時15分までに限られる」と書いている。<sup>35)</sup> シカゴ大学実験学校の歴史をまとめたアイダ・ディペンシアによれば「1897年11月になると、デューイ氏は十分な数の案内者がいないことを嘆くようになった。参観者は部屋から部屋へと自由に行き来し——事実、デューイ氏は自由に見てくれと言っていた——そして各部屋には参観者用の椅子が置かれていた。1899年になると月曜日と火曜日と金曜日が参観日と決められ、翌年には月曜日と水曜日と金曜日が指定された。」<sup>36)</sup>

#### 経験学習か系統学習か

デューイ・スクールを参観した一人、ハリエット・ファランド (Harriet A. Farrand) はこの学校の実際の様子を次のように報告している。時期はおそらく設立からまる2年が経過したころ、デューイ・スクールがまだロサリー・コートにあった1898年の6月ころであろう。

教科書はまったく使われていない。綴り、算数、地理、文法、歴史、その他どんなものにおいても、決められた題目を学んだり復唱したりすることはない。しかし、一貫した学習課程 (course) は存在しており、それらのものは付随物として、それらに出会ったときに習得されるように設定されている。算数を扱う機会は、大工仕事、料理、単純な器械の制作と使用といったことの中で不断に提供されるようになっている。字の書ける生徒は一人一人、授業で学んだことの要点を書き出し、それがペンマンシップ、綴り、句読法、構文を練習する豊かな機会となっている。日常使用しているものについてそれらの生産地がたどられるとき、地理の学習がおこなわれる。歴史においても地図が常に使われている。化学の諸原理は料理と理科の時間に学ばれる。そして、子どもたちが器械やその他さまざまな作品を製作する中で、自然の原理が教えられる。そのようにしてすべての学習分野が自然な関係の中で結びあわせられ調和されて相互に補い合うので、いずれも割り当てられた以上の時間と注意を要することはない。<sup>37)</sup>

この種の参観記を読むときには、それなりに補足や留保をつけて読む必要である。なぜなら、上記の記述は見たままを書いているのではなく、おそらくはこの学校の教師かだれかに取材して得たにちがいないこの学校の基本方針の説明だからである。特に最後の一文はそうであろう。読み書き計算や教科書をきちんと教えず、工作や遊戯ばかりやっていて、いったい子どもたちはどうやって必要な知識と訓練を身につけるのか。ここでは、そうした外部の素朴な疑問や批判に答えるこの学校の公式見解が報告されていると見てよいであろう。

そのうえで、この学校には「一貫した学習課程 (course) が存在している」というファランドの



記述に注目して、あらためて上記の引用部分全体を読みなおしてみる必要がある。すると、例えば「料理」の中で算数や読み書きや理科の学習が「付随的」におこなわれるようになってきているというのは、実は教師たちによって周到に準備された仕掛けだということがわかる。つまり、学習は活動の中で活動を通じておこなわれるというのは、学習がその時々偶然にまかされているということではなくて、教師の側にあらかじめ何をどこまで学ばせるかについての「一貫した学習課程」の設計があって、そのうえで「料理」なら「料理」という活動がおこなわれているわけである。世上よく言われる「為すことによって学ぶ」(learning by doing)というのは、実は「学ぶために為す」(doing for learning)というのが本領だったのであり、子どもたちに系統的に学習に取り組みさせる一つの筋道として、大工仕事や料理や器械の制作といった一連の活動が計画的に用意されたのである。

確かに生徒の側から見れば「それらのものは付随物として、それらに出会ったときに習得される」というのはそのとおりである。しかし、教師の側では「すべての学習分野が自然な関係の中で結びあわせられ調和されて相互に補い合う」ように、つまり個々の学習内容の間に系統性が保たれるように、どんな学習をいつどのような形でどこに組み込んでいくかが常に考慮されていた。例えば、ファランドの参観記には次のような箇所が出てくる。

別の部屋では裁縫がおこなわれていた。そして、少年たちは少女たちが大工道具の扱いで見せたのと同じように、針を器用に扱っていた。子どもたちが縫っている間、教師は彼らがいま縫っているリンネルが生産されたアイルランドの亜麻畑についての記述を声を出して読んだ。<sup>38)</sup>

こうした教師の行為は、もちろんその場の思いつきでやっているのではない。そこにはその後の地理の学習への関連づけがあらかじめ周到に準備されているのである。そして、デューイにとっても実験学校の教師たちにとっても、彼らが理論的にまた実践的に最も苦心したのは「一貫した学習課程」をどのようにして創りあげるかという点にあったことはまちがいない。実験学校独自の教科課程 (course of study) の開発には3カ年を要したこと、そしてデューイ自身その一応の完成をもって当面の「実験期間の終了」を宣言したことについては、既に前節で見たとおりである。

## 自由と規律

さて、続いて参観記はファランド自身の率直な印象を記している。

参観者がまず何よりも印象づけられるのは、あらゆるところに自由と開放感がみなぎっていることである。数人の子どもたちが異なった部屋のあちらこちらに大人の人を中心に集まっていて、きわめて興味深そうに見えるものについて全員で親しげに話し合っている。だから最初は、最高に幸福な時間をすごしている大きな家族の中に入り込んだような気がする。

集会室と図書室を除いて、机や据えつけの椅子は見当たらない。一クラス8人から10人の子どもが集合するときも、教師に向かって整列して並ぶことはなく、子どもたちは背の低い椅子をもってきて、ちょうど家のように思い思いに教師のまわりに集まり、それから教師が物語を語り聞かせる。もし彼らが足を投げ出したければ、まったく自由にそうすることができる。場所が変わることも静かにそうするなら許される。そして、もし話し合いをおこなっている最中に何か興奮するような箇所だれかが熱狂して椅子から飛び出し、夢中になって飛んだり跳ねたりしたとしても、教師から厳しく叱責されることはないだろうと思われる。子どもたちはクラスでもほかの場所でもお互いに自由に話し合ってよいし、難しい問題についての討論はしばしば激論になる。だが、このように拘束はないけれども、しかし自由が放縦に墮すことはけっして許されていない。<sup>39)</sup>

いわゆる児童中心 (child-centered) の新学校の特徴である自由な雰囲気について述べられている。こうしたデューイ・スクールの光景は、当時の一般的な学校の授業風景と比較すれば、その違いは歴然としていた。当時の一般的な学校の授業風景は、ある教師によって例えばこんな具合に紹介されている。

わたしは、数年前ニューヨークのある大規模校で算数の授業を見学した。子どもたちがいっせいに教科書を取り出して「いち、に、さん」と数えはじめる。次に、石板を手にもち、書いたものを水で消し、再び計算をする。それから一つの場所に進んでいって一列に並び、整列して掛け算九九表を読み、それを書き写し、それから復唱をおこなう。そして座席に戻る。授業全体は高性能の機械のように整然としていて、それが視学官の誇りであった。その人は、いついかなる時間にどの学年のどの教室に行っても子どもたちは同じ方法で同じ課題に取り組んでいると自慢した。これは誇張ではない。<sup>40)</sup>

しかしここでも、デューイ・スクールは自由で開放的で素晴らしいと言うだけではすまない問題がある。まず確認しておくべきことは、この学校では一クラスが8人から10人になっているということである。デューイは資金的にどんなに苦しくても絶対にこの点を譲らなかった。<sup>41)</sup> そのうえで、ファランドの報告にある「拘束はないけれども、しかし自由が放縦に墮すことはけっして許されていない」という指摘を、この学校の基本的な性格にかかわる指摘として掘り下げて理解する必要がある。

上で見たように当時の一般の学校では、教師の号令で多数の生徒が一斉に教科書を開いたり計算問題に取りかかったり掛け算九九表を読み上げたりと、まるで工場か兵舎のような画一的で外部統制型の行動規律が求められていた。これに対して、デューイ・スクールではそれとはまったく種類を異にする自覚的で内部統制型の行動規律がきちんと求められていた。このことを見逃すべきではない。ファランドが書いている「場所が変わることも静かにそうするなら許される」というのは、子どもたちに対する自己規律の要求の一例である。話し合いの最中にだれかが夢中になって飛んだ

り跳ねたりしたとしても「教師から厳しく叱責されることはないだろう」というのも、既にこの子どもたちの間には、自分たちがいま何をしようとしているのか、その必要を考えて、自分たちの行動を相互に抑制しあうだけの力が働いていることの証拠であろう。さらに言えば、「子どもたちはクラスでもほかの場所でもお互いに自由に話し合っただけ」というのは、一般の学校のように通常教師に指名された者だけが求められた範囲内で話すことを許されるということと対照して「自由」ということであって、子どもたちがいつでもどこでも勝手なおしゃべりをしているというのではもちろんない。

だから、デューイ・スクールでは「拘束はないけれども、しかし自由が放縦に墮すことは決して許されてはいない」というのは、デューイ・スクールへの誤解や偏見を解くための但し書きとといった程度に受け取ってはならないのである。それはもっと積極的な意味を含んでいる。つまり、デューイ・スクールでは高性能の機械のような規律（discipline）は否定するけれども、それとはまったく種類を異にする新しい規律の形成がめざされていたということである。厳格な規律のアンチテーゼは無規律と放縦ではなく、洗練された自己規律（self-discipline）である。このことをデューイ・スクールは実証しようとしていたのである。

学校開設からまる3年が経過したころ、デューイは実験学校の父母たちを前に次のように述べた。

いわゆる規律と秩序の側面に関して、当大学附属小学校はおそらく最も多くの誤解と間違った説明を被ってきたと言えるが、この側面に関してわたしは、われわれの理想は厳格な学年制の学校の理想よりもむしろ最良の家庭生活の理想であったとだけ言っておこう。前者においては一人の教師がきわめて多数の子どもたちを扱わなければならない、したがって生徒たちに許される活動の範囲はきわめて限定されているので、「秩序を保つ」ための固定的でいく分か外面的な型が必要とされる。われわれの学校はこれとは条件が異なっているので、こうしたやり方をそのまま踏襲すればまったくばかげたことになるだろう。少人数であるため、生徒と教師は親密な接触が可能となり、またそれを必要とする。授業の進め方は非常に多様なので、個々の子どもたちの要求にそれぞれの仕方に対応することができる。もしわれわれがわれわれの子どもたちに通常よりも多くの自由を許してきたとすれば、それは真の規律をゆるめたり減じたりするためではなくて、われわれの特殊な条件のもとではより大きな責任が自然な形で子どもたちに要求されるからである。<sup>42)</sup> (傍点筆者)

### 実験室の精神

画一的で外部統制型の規律がもともと一人の教師が多数の生徒を相手にする一斉授業の学習形態と結びついているように、デューイ・スクールの子どもたちに見られる自覚的な内部統制型の規律はこの学校の独特の学習形態と深く結びついている。

何よりもまず、デューイ・スクールでは少人数の生徒たちが一つの親密な学習共同体を構成して、学習はその中でチームワークとして遂行される。先のファランドの記述にあったように、彼

がこの学校の教室で最初に目にした光景は、教師が黒板を背に生徒と向かい合う通常の教室の授業風景ではなく、子どもたちが教師を中心に集まって何やら興味深そうなものについて全員で親しげに話し合っている様子であった。そして、その様子はとても家族的であったと彼は記していた。もっと具体的には、例えば理科の授業について彼はこんな具合に報告している。

別の部屋の隅では、子どもたちが奇妙な形の肉片の入った大きな皿の周りに集まって、熱心にのぞき込んでいた。やがてそれは子牛の肺であることがわかった。彼らはいま血液による呼吸について学んでいるのであった。一人の少年が熱心に<sup>ふいご</sup>肺を動かし、その口先が気管の中に挿入されていて、呼吸の様子を再現して見せていた。ほかの子どもたちは拡大鏡と顕微鏡で肺の細胞構造を確かめていた。そして、肺という肉体器官のもつばらしいメカニズムについて、教師の説明を全員が熱心に聞き入っていた。その後、子どもたちはそれを自分たちの冊子にすべて記録したが、概してその説明は正確であるとともにすばらしく生き生きとしたものであった。<sup>43)</sup>

おそらくここで子どもたちは、一つの事実を前に、事実を確認し、事実に感動し、事実につき動かされて、見たこと感じたことを率直に口に出していたことだろう。しかし、ここで肝心なことは、このような観察や実験は既に教科書にまとめられている呼吸や循環についての記述を実地に確認したり理解の定着を図ったりするための手段としておこなわれているのではないということである。むしろそれは、小さな科学者たちによるオリジナルな研究の一環としておこなわれている。このことはファランドも確認している。

この子どもたちは彼ら自身のオリジナルな研究をするように奨励され、それまで彼らに知られていなかった事実を自分たちで発見することは、彼らの大きな喜びとなっている。<sup>44)</sup>

だから、子どもたちが自分たちで実際に見たこと、確かめたこと、試したこと、調べたこと、そして教師から聞いた説明等々を「自分たちの冊子に記録する」というのは、最終的に自分たちの手で研究成果報告書のようなものを作成するための記録づくりということである。ファランドの参観記には出てこないのが、子どもたちが実際に記した研究報告の具体例をデューイの『学校と社会』から引用してみよう。

ずっとむかし、地球が新しくて熔岩であったころ、地球上には水がありませんでした。地球の周囲はすっかり水蒸気でおおわれていて、空気中には色々のガスがありました。そのガスの一つは二酸化炭素でした。地球が冷えはじめたので、水蒸気は雲になり、そしてまもなく雨が降りだしました。そして、水が上から降ってきて、空気中の二酸化炭素を溶かしました。<sup>45)</sup>

このあと二酸化炭素を含んだ水が岩石中のカルシウムを溶かして海に運び、やがてサンゴのような海洋動物によってカルシウムが固定されて石灰岩の層ができるといった記述が続いていく。もちろんこれらの内容は教師にとっては既によく知られていることである。しかし、当の子どもたちにとってはそれら一つ一つが新しい事実の発見であり解明である。デューイ・スクールにおいては子どもたちの学習活動は真理の発見と解明に従事する科学者たちの研究活動と同じ精神において組織されている。それは理科だけにかぎらず、地理や歴史の学習においても同様である。この点こそ、デューイ・スクールの授業実践を牧歌的な児童中心主義や後の「プロジェクト・メソッド」<sup>クリティカル・ポイント</sup>「生活学校」「地域社会学校」などの諸実践から区別する決定的な点なのである。

だから、デューイ・スクールには自由で開放的で家族的な雰囲気があるというのは確かに一面ではそうなのだが、同時にそこには大学の研究室や実験室におけると同様、真理の探究に携わる者の真剣さや緊張感といったものが支配している。子どもたちは、単に子ども向けにあつらえた真似事に従事しているのではなく、大人顔負けに実地にもものごとに取り組んでいるのであり、彼らはそれぞれ自分が取り組んでいる課題や作業については自分が責任を負っているというプライドのようなものをもっている。そして、外部からの参観者の目の前で淡々と課題や作業をこなし、尋ねられれば自分たちがいま何を研究しているか子どもなりに自信に満ちた態度で説明する。デューイ・スクールの子どもたちに見られる自己統制型の規律は、彼らのこうした普段の学習態度と一体のものである。このことはファランドが引用しているこの学校の基本目標、すなわち「子どもの活動的な探究の態度を生き生きと保ち方向づけることによって、事実や原理の習得を知的自己統制 (intellectual self-control) へとつなげていくこと」<sup>46)</sup>に示されている。

ファランドは「この学校には5才から13才までの約60人の生徒がいて、年齢または成熟度や達成能力に応じてグループに分けられ、各グループはそれぞれ独自の課題をもっている」<sup>47)</sup>と述べているが、ここでは子どもたちが「独自の課題をもっている」という点が特別に重要なのである。デューイ・スクールの子供たちは、単に学校にやってくる思い思いに好きなことをやっているのでもなければ、教師からの指示をただ待っているのでもない。彼らはグループごとに課題をもっていて、その課題を達成するために学校にやってくるのである。だから、子どもたち自身にしてみれば、彼らは「生徒」として学校にやってくるのではなく、自分たちには学校に行きやらないなら<sup>ワーク</sup>ない仕事があるという感覚で学校にやってくるのである。

学校を子どもたちの生活と結びつけ、学校を子どもたちがそこでもって生活をする場所にすべきだというデューイの主張は、実は、学校という場所に対する子どもたちの側のこうした意識の構えの転換があってこそはじめて意味をもつものだったのではないだろうか。デューイも「子どもたちは学校に来ることを好みあるいは熱愛しているけれども、娯楽ではなく仕事 (work)こそが当校の教育の基本精神である」と述べている。<sup>48)</sup>

## 責任と誇り

ファランドが記している次のような木工作業の様子についても、以上のことを念頭においたうえで読んでみる必要がある。

一階は大工仕事の作業室になっており、子ども用の低い作業台があって、それぞれには大工道具が一式備えられている。小さな労働者が——男の子も女の子も一緒に——それぞれの制作物について寸法を図ったり、長さを合わせたり、ノコギリを引いたり、設計をしたり、ハンマーをたたいたりしているのを見ることは興味深いことだった。彼らは、何よりもまず学校が必要とする木工品を作っている。それらは多数の色々な種類のものである。そのうえで、各自の好きなものを作ってよいことになっている。一人の少年は水車を作っていた。別の少年は歴史の授業でみんなに見せるために、有史以前の時代に使われていたものと思われる武器を制作していた。ほかの二人の少年は、ニューイングランドの植民者たちが戦の時に磐として使ったような家を小さな木片で作っていた——これもまた別の歴史の授業で使うものだった。別の少年は母親にプレゼントをして驚かすために、カエデの美しい木目塗りのペーパーナイフに最後の仕上げをしているところであった。二人の少女は人形をのせる椅子を作っていたが、その小割り板は注意深く測定し正しい長さにノコギリを引かなければならないものだった。大きなノコギリを前後に引くのは小さな手には大変な仕事であったが、彼女たちは交代でそれをやり、最後までやりとおした。もう一人の少女は、大きな人形のベッドの木枠を作っていた。つなぎ目は正確にきっちりと合わさっていたので、熟練者が作ったように見えた。驚いたわれわれが「これ、全部自分でやったの」と尋ねると、子どもなりにプライドをもって「細かいところまで全部よ」(“Every bit of it.”)と答えた。<sup>49)</sup>

ファランドは、この子どもたちは「小さな労働者」であり、彼らがノコギリやハンマーを使って仕事をしている様子を見ることは「興味深いことだった」と印象を語っている。しかしここでも、ただ単に「興味深い」というだけでは見すごしてしまうデューイ・スクールの教育の基本的な性格をはっきりと確認しておく必要がある。「小さな労働者」という表現は子どもたちが真似事の工作ではなく本格的な木工作業をおこなっていることを示唆する表現である。「学校が必要とする木工品」としては、例えば試験管立てや岩石の標本箱、植物の鉢台、パンを焼くときに使う木製のスコップといったものがある。それらは必要な数だけいくつも作る必要があり、そして一つ一つが実際の使用に耐えられるだけの出来ばえを要求される。デューイ・スクールの木工室はいわば学校全体に必需品を供給する工房といったおもむきであり、そこで作業する子どもたちはまさに「小さな労働者」なのである。言い換えれば、理科での学習活動が大学の実験室と同じ精神において組織されていたように、木工室での作業は職人の工房と同じ精神において遂行されているということである。彼らは自分の仕事に子どもなりに責任と誇りをもっている。そこでは妥協を許さない作業の正確さが要求され、だからこそそうした作業は同時に正確な測定や計算、種々の材木の性質についての知識を必要とし、それらの確実な習得を要求するのである。そこから例えば樹木の成長について、

理科の学習が発展していこうことは言うまでもない。工房の職人だった子どもたちは、今度は実験室で植物学者に変身するのである。

同様に、子どもたちがそれぞれの創意で「好きなものを作ってよい」場合にも、彼らはけっして思い思いに工作にうち興じているわけではない。このことはファランドの先の文面からも読み取れる。ある子は石器時代の武器を、ある子は植民地時代の砦とりでの模型を作っている。それらは歴史の授業における彼らの「オリジナルな研究」の一部として取り組まれているものであり、それらを通して過去の人々の生活を正確に再認するためのものである。だから、単なる空想や思いつきで作っているのではない。これまでの学習内容の正確な理解をふまえて、かぎりなく本物に近いものを作ろうとしているのである。同様に、木目塗りのペーパーナイフを作っている少年、あるいは人形の椅子いすやベッドの木枠こしらを作っている少女たちも、彼らは自分たちの生活に実際に役に立つものを作っているものであり、それらの出来ばえはときに熟練者が作ったように見えることもあるほどの本格的な木工品を作っているのである。

#### 4. 初等教育と高等教育の結合

##### 教室空間

シカゴ大学附属小学校はデューイが子どもの教育について前例のない壮大な実験を試みるために設立したものであるから、学校についての通常の観念や常識は最初から排除されていた。教科書は使わない。算数や書き取りのドリルはおこなわない。テストや評点がない。住宅を学校にしたのも、もちろん新たに学校を建設するだけの資金がまったくなかったことが第一ではあるが、デューイが企図する教育実験のためには、教壇と黒板があって机とイスが整然と並んでいるありきたりの教室、そしてそうした教室がいくつか並んでいる普通の学校というものでは用をなさなかったことも事実である。つまり、学校の既成の空間構成そのものを根本から変えてみる必要があったのである。

デューイは『学校と社会』の中で通常の学校の教室を次のように批判している。

もしわれわれが、醜い机が幾列にも幾何学的に整然とならべられて、できるだけ活動する余地をのこさないように密集させられており、その机たるやほとんどみな同じ大きさで、その上に本・鉛筆・紙などを載せるのにちょうど足りるぐらいの広さであり、そのほかにはテーブルが一個、椅子が二、三脚、なんの飾りもないはだかの壁、或いはせいぜい二、三枚の絵のかかっている壁、といったありふれた教室の風景を心のなかに思い浮かべてみるならば、われわれはこのような場所でおこなわれる唯一の教育活動を再構成することができるであろう。それはすべてものを聴くためにつくられたものである。というのは、たんに書物から学科を学ぶということは、聴講の一種にほかならないからである。それは一つの心が他の心に従属・依存していることをしめすものである。ものを聴くという態度は、比較的にいえば、受動的の態度であり、ものを吸収する態度である。すなわち、それは一定の出来合いの教材がそこに存在すること、そ

の教材は教育長・教育委員会・教師などがあらかじめ準備しておいたものであり、子どもはできるだけ最少の時間にできるだけ多量の教材を取り込めばよいということの意味している。

伝統的な教室には、子どもが作業する場というものがほとんどない。子どもが構成し、創造し、そして能動的に探究するための作業場・実験室・材料・道具がない。いやそういうことに必要な空間さえもが、大部分欠如している。<sup>50)</sup>

デューイは、子どもたちが教師からものを教えてもらうことをただ待っているような学校を完全に否定している。学校は子どもたちが知識を受け取りにくところではなくて、自ら知識を構成し、創造し、探究する場所とならなければならない。だから、学校には作業室が、実験室が、図書室が、博物館が必要になる。

### 真理探究の精神

『学校と社会』の第3章にはデューイが描いた理想的な学校の平面図がのっている。一階は中央に図書室、四隅に台所、食堂、作業室、織物室が配置されている。二階は中央が博物室で、四隅に物理・化学実験室と生物実験室、および美術と音楽のスタジオがある。これは実際の学校の設計図ではなく、デューイが考える学校の理念をあくまで図式的に表現したものである。<sup>51)</sup> だからここで肝心なのはその理念である。

作業室、実験室、図書室、博物室などを小学校に整えるということは、100年前の時代には「物好き」とか「気取り」とか椰揄されたい。<sup>52)</sup> 今日ではそういうものを一つも備えていない学校のほうがむしろ珍しい。しかし、100年前デューイが作業室、実験室、図書室、博物室などの必要性を訴えたときの彼の主張は今日においてもまったく新奇である。その主張とは、要するに学校を、シカゴ大学のような先端的な研究施設をもち各学問分野で知識の生産と蓄積が活発におこなわれている総合大学(University)と同じ精神において組織するということである。自由な真理探究に携わる大学と幼い子どもたちが通う小学校とを直接結びつけること、これはデューイが企図した教育実験の一つであった。『学校と社会』の次の一節はデューイ・スクールの性格を知るうえで重要である。

今日の学校制度においては「下級」の部分と「上級」の部分とが生きた関連をなしていない。大学やカレッジは、その建前から言えば、学問研究の場所であり、研究調査が不断におこなわれつつある場所である。図書館や博物館があって、過去の最善の資料が収集され保存され組織されている場所である。しかしながら、探究の精神はただ探究の態度をもってしてのみ獲得されうるものであることは、大学の場合におけると同様に、下級の学校の場合においても真実である。生徒は単にあれこれ些末な事柄を学ぶのではなく、意味のある事柄、彼の視野を拡大する事柄を学ばなければならない。<sup>53)</sup>



さらに別の箇所ではこう述べている。

当大学の教育学科のこの学校が背負っているものが何であるかと言えば、それは4才の子どもの教育からはじまって大学院におよぶまでの、教育の統一のためのモデルとして何か役立つようなことをなしとげる必要性である。既にわれわれは、当大学の各学科長によって時には細部にまでにわたって計画された科学的研究の援助を得ている。大学院の学生は自分の研究と方法を携えてわれわれのところに来て、いろいろとアイデアや問題を指摘してくれている。われわれは教育上のすべての事柄を結び合わせたいと思っている。子どもの教育と青年学徒の教育とを分割している障壁を打破し、初等教育と高等教育を一体化して、教育には初等も高等もない、ただあるのは教育だけだということを目のあたりに実証してみたいと思っている。<sup>54)</sup>

デューイ・スクールには教育学や心理学ばかりでなく、物理学、生物学、地質学、人類学、地理学、社会学、歴史学など、シカゴ大学のさまざまな学科から第一線の研究者や博士課程の大学院生がやってきて、それぞれ自分の専門分野の立場から小学校の教材開発や教授法の改善、カリキュラムの編成などについてデューイ・スクールの教師たちに協力し、アイデアを与えたり、実際に授業をおこなったりした。また、子どもたちはしばしば大学の研究室や実験室を訪問して、実際に実験器具にふれてみたり標本を見せてもらったり、今ここで何が研究されているかについて説明を受けたり、恐竜や天体について興味深い話を聞いたりした。

もちろんこうしたことはシカゴ大学の附属学校だからこそできたことである。しかし、恵まれた条件がたまたまそこにあったというだけではなくて、初等教育を高等教育と、しかも学問研究の最前線にたつ研究室や実験室とじかに結びつけ、「探究の精神と態度」において子どもたちの教育を組織するというデューイの確固とした方針が最初からなければ、このような大学との協力関係が生まれなかったことは言うまでもない。

一般の学校が日常的に大学の研究者や大学院生の協力を得たり、大学の研究施設を自由に利用するなどということができないわけではない。だから、どこの学校でもデューイ・スクールの実践をそのまま模倣するというわけにはいかない。デューイは、自分たちの学校は「生きた標本」にすぎないと言っている。<sup>55)</sup>つまり、現実に各学校がどこかの大学と具体的な協力関係をつくりあげることが問題なのではない。問題はまさに、一方に真理の発見と蓄積をおこなう大学があり、他方にはあいかかわらず機械的な反復練習によって時代遅れの知識をただ暗唱させているだけの学校があるといった教育の分裂状態を打破することである。そして、そのための方法と原理をデューイ・スクールは試行錯誤を繰り返しながら実験的に明らかにしようということなのである。

#### 学校段階のアーティキュレーション（接続関係）の問題

デューイがここで初等・中等・高等を貫く教育の統一ということを言っているのは、単に複線型

の差別的な学校制度を単線型の統一的な学校制度に変えるといった学校制度の問題のことを言っているのではない。アメリカではこの時代、初等教育から上方に拡大して高等教育へと接続する公立ハイスクールが急速に普及しはじめていたが、それに象徴されるように、単線型学校制度は現実には形を整えはじめていた。しかし、それにもかかわらず実態としては、初等・中等・高等の各学校段階が教育の目的においても、方法や内容においても、なお一つの完全な全体に接合されるまでには至っていない。デューイはこのことを鋭く指摘している。つまり、単線型学校制度における各学校段階間のアーティキュレーション（接続関係）の問題を指摘しているのである。とりわけ彼が問題にするのは、初等・中等・高等を貫く教育内容の一貫性の欠如である。実際、彼は次のように論じている。

わたしは、学校制度のさまざまな部分が孤立していること、そして教育のさまざまな目的の間に統一性がなく、さまざまな教科と方法に一貫性が欠如していること、このことに皆さんの注意を促したい。……学校制度の各部分がばらばらであるように、それぞれが掲げる理想もまたばらばらである——つまり、道徳性の発達、生活に役立つ実用性、一般教養、訓育、職業訓練など、これらの目的はそれぞれが教育制度のある特定の部分によって代表されているのである。そして、各部分の相互浸透が進むにつれて、各々が教養、訓育、実用性のある程度まで与えるようになっていくと考えられている。しかし、それでもなお根本的な統一が欠けていることは次の事実で明らかなのである。すなわち、依然としてある教科は訓育に役立つ、別の教科は教養に役立つといった具合に考えられているのである。例えば、算術のある部分は訓育に、ある部分は実用に、文学は教養に、文法は訓育に、地理は一部が実用に、他の一部が教養に役立つ等々。教育の統一などみるかげもなく、諸教科は勝手な方向を向いてばらばらである。この教科のこれこれはこの目的に役立つ、この教科のこれこれはまた別の目的に役立つといった具合に、ついには全体は対立する諸目的とばらばらな諸教科の間の単なる妥協とつぎはぎ細工になるのである。教育行政上の一大問題は、こうした多かれ少なかれ関連性を欠き互いに重複している諸部分を統一ある全体へとまとめあげ、それらの間の摩擦と重複から生じる浪費をなくすことであり、かくして学校制度の各部分に正しい移行の橋渡しをすることである。<sup>56)</sup>

シカゴ大学実験学校は、先に引用したデューイ自身の言葉にあったように「4才の子どもの教育からはじまって大学院におよぶまでの、教育の統一のためのモデル」を提供することを、その教育実験の重要な課題にしていた。つまり、各学校段階間のアーティキュレーションの問題に、生きた学校実践の姿を通して一つの解答を与えようとしていたのである。デューイは、設立の当初から実験学校が初等段階のみならず、教育実験の進展とともにやがては中等段階までも含むことを予定していた。<sup>57)</sup>それは、彼が初等・中等・高等を貫く教育の統一を、子どもの成長・発達の段階に即して、下から発生論的に構想しようとしていたことを示している。

しかもこの構想自体、彼自身の哲学理論を教育の過程を通じて実地にテストする一大実験として

の意味をもっていた。彼は、晩年にシカゴの実験学校を理論的に総括した論文の中で、実験学校の目的を次のように説明した。

実験学校の目的は、作業仮説として用いられたいくつかの諸観念をテストすることだった。これらの観念は哲学と心理学から引き出されたものであり、一部の人々はきっと心理学の哲学的解釈とでも言うだろう。その根底には次のようなことを強調する認識の理論 (theory of knowledge) があった。すなわち、活動場面において生じるさまざまな問題こそが思考を促すのであり、その思考が確実な知識をもたらすためには行動によって思考をテストする必要があるということである。認識の包括的な理論 (a comprehensive theory of knowledge) を実際にテストすることができる場所は、教育の過程においてほかにない。そして、学校の諸教科のばらばらで分散し孤立した状態は、それこそ認識の統一理論 (a theory of the unity of knowledge) を単に机上においてではなく、具体的に生きた姿でつくりあげるためのまたとない機会を提供するものと思われたのである。<sup>58)</sup>

ここで「認識の包括的な理論」とか「認識の統一理論」とかと言われているものは、直接にはデューイがシカゴ時代につくりあげた道具主義 (instrumentalism) の論理学を指す。それは、要するに近代科学の方法を思考過程の心理学的分析によって基礎づけるものであったが、同時にそれは単純な感覚・知覚の作用からはじまって日常的な思考の働き、さらには最先端の科学や道徳上の価値選択に至るまで、すべてを行為の選択 (または適応) にともなう心理学的過程として包括的に説明するものであった。そこでは、最先端の科学といえども、人々が日常生活の中でおこなっている問題解決の思考過程と本質的な違いはなく、いわばそれが最高度に純化されて成立した知の形態と捉えられ、科学と日常の思考は種類の違いではなく、洗練度の違いとして捉えられたのである。

こうした「認識の統一理論」を教育の過程に適用するということは、子どもの成長・発達の各段階において思考がどのような心理学的特性を現すかを研究し、それぞれに的確に対応した学習の内容と方法を組織するということを意味した。<sup>59)</sup> すなわち「特定の成長段階に見られる主要な要求や諸力に最も的確に応答する学習内容を選択し編成すること、そして選択された教材が子どもの成長過程の中にいきいきと入り込むことができるように教材を提示する方法を構築すること」である。<sup>59)</sup> そして、これこそまさにデューイの実験学校が実践上の最も中心的な研究課題としていたものであった。そこでは、何よりも「子どもの能力と経験の自然な成長過程に調和する教科課程 (a course of study)」<sup>60)</sup>の研究開発が、日々の実践を通してめざされていたのである。

デューイは、初等教育の期間 (4～13才) を3つの発達段階に区分し、実験学校の教科課程はそれぞれの段階の発達特性に見合った形でスコープとシークエンスが設定されていることを説明している。<sup>61)</sup> もし実験学校が13才以降の中等段階にまで拡大しカレッジへと接続するところまで完成していたならば、そこには4才の子どもの教育からはじまって、カレッジ、大学院にまでおよぶ一貫した教育課程のモデルができあがったことであろう。少なくとも、デューイは最初からそのことを

ねらいとして実験学校を開始したのであった。

しかも、こうしたデューイの構想はまさにシカゴ大学においてこそ実現が可能だったのである。なぜなら、シカゴ大学は本体である大学院課程の下にシニア・カレッジ（学部3・4年生課程）とジュニア・カレッジ（学部1・2年生課程）を付設し、さらにその下にカレッジ進学の準備校としてサウスサイド・アカデミー（South Side Academy）という中等学校を付設するという体制をとっていたからである。さらに、シカゴ大学は独立の部局として大学提携部（The Division of University Affiliations）を設置し、学外のいくつかのカレッジやアカデミー、ハイスクールを提携校としてシカゴ大学の傘下に接続させるということまでおこなっていた。<sup>62)</sup>

だから、デューイが新たに小学校を教育学科の実験施設という形でシカゴ大学に開設したとき、シカゴ大学はその内部に小学校から大学院課程に至る学校教育の全段階を有する文字どおりの総合大学（university）になったのである。デューイが、実験学校は初等・中等・高等を貫く統一的な教育の「生きた標本」を提供するものだと思いついていたのも当然であろう。しかも、彼のそうした意気込みは学長のウィリアム・レイニー・ハーパー（William Rainy Harper）によって完全に支持されていた。ハーパーはデューイの実験学校の取り組みについて「シカゴとイリノイ州ばかりか、アメリカ全体の公教育制度にとってもきわめて有益なことが期待できるとすれば、それは当大学の附属小学校をおいてほかになく、要するにそれは教育学の実験室なのである」<sup>63)</sup>と最大級の賛辞を送っている。ここで彼が「教育学の実験室である」と言っているのは、アメリカ全体の公教育制度にとっての有益な実験室ということであり、つまりはデューイと同様、彼もこの学校が初等・中等・高等を貫く統一的な教育のあるべき姿を探究するための実験室となることを期待していたのである。それというのも、デューイがシカゴに来る以前に、既にハーパー自身が新生シカゴ大学を初等から高等に至る全教育制度の頂点に位置する一大研究・教育機関にしようという壮大な計画をもっていたからである。

ハーパー学長は、一方でシカゴ大学を学問研究の最前線に立つ第一級の大学院大学として確立することに尽力するとともに、他方でそうした研究大学にカレッジやアカデミー、ハイスクールを有機的に結びつけることによって、中等教育、さらには初等教育までも視野におさめた教育制度全般の改革を意図していた。そのために、シカゴ大学では半年ごとにキャンパスに提携先の中等学校の教師たちを集め、学長はじめ大学の教員も参加して、中等教育の教科内容の現代化、水準の引き上げ、高等教育と中等教育の間のアーティキュレーションの改善といった問題について大規模な教育研究集会が開催された。そのほか、シカゴ大学では初等、中等の各種の教員集会やさまざまな教育研究団体の会議が頻繁に催された。また、大学の各専門学科はそれぞれの対応する教科の中等教員を対象に夏期講習をおこなったり、大学教員が師範学校やアカデミーに向向いて公開講座をおこなうといった形で、中等教員の現職教育にも取り組んでいた。<sup>64)</sup>

デューイの実験学校は、まさにこうしたシカゴ大学の体制の中で、それを背景として誕生したのである。実験学校には大学の各専門分野の研究者や大学院生がやってきて、教師たちに協力したり

直接子どもたちの指導にあたりたりしていたことについては既に述べた。そこでは学問研究の最前線に位置する人々が学校教育のまさに開始の段階にある小学校の教育実験に携わることによって、高等教育の立場から直接初等教育の改善に協力する体制がとられていたのである。デューイは、大学に小学校を設けることの意義を次のように説明している。

大学との関係に関して言えば、実験学校の編入は、現代の大学がその住み家でありまたそれを具現しているところの知的諸方法を、初等教育と中等教育のあらゆる問題に関係づけることを意味している。下位の教育を大学の仕事を鼓舞している知的諸理想と融合すること、精神の最高度の飛翔における発見と応用にとってきわめて有益な精神の諸方法と諸作用がどのようにして子どもの学校教育のまさに開始から効果的に作用するようにできるのかを示すことは、確かにかなり意義のある事実である。<sup>65)</sup>

デューイが初等教育を高等教育と直結させ、小学校の子どもたちの学習活動を大学の研究室や実験室と同じ「探究の精神と態度」において組織しようとしたのは、一方に真理の発見と蓄積に従事する大学があり、他方に出来合いの知識をただ機械的に教え込むだけの学校があるという学校制度上の分裂を打破するためであった。シカゴ大学のような一流の研究施設を備えた総合大学の成立が、人類がこれまでに達成した最高度の知的活動の姿を象徴としているとすれば、それは下級の学校においても実現されなければならない。子どもたちは、ただ単に出来合いの知識を受け取りに学校に来るのではなく、自ら真理を探究し本物の知識を学びとるために学校に来るのだからなければならないのである。

デューイ・スクールを参観したある母親が、どうしてこの学校では子どもたちに結論を教えないで、彼らに一つ一つ実験をさせながら自分たちで結論を導き出すようにしているのかと尋ねた。この質問に対してデューイ・スクールの一教師は次のように答えた。「なぜならプロセスこそ価値ある部分だからです。今日ではどこの大学でも実験室をもち、学生は教官が実験するのをただ見ているよりも、彼ら自身で実験をおこなっています。わたしたちはこれと同じ考えを小学校で実行しているだけなのです。」<sup>66)</sup> この説明こそデューイの実験学校の精神そのものを表すものだった。

## 註

- 1) John Dewey, *School and Society* (1899), *Middle Works of John Dewey*, vol. 1 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1976), pp. 1-110.
- 2) John Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, pp. 58-59.
- 3) 「実験学校」という言い方は英語では "The Laboratory School" と "The Experimental School" の二通りの言い方がある。"The Laboratory School" という言い方は、1901年にフランシス・ウェイランド・パーカー (Francis Wayland Parker) のシカゴ教員養成学院 (The Chicago Institute) がシカゴ大学に教育学部 (The School of Education) として編入されたとき、その附属小学校が "The University Elementary School" の名称を用いることになったので、デューイの教育学科 (The Department of Education) の小学校の方は "The University Laboratory School" の名称を用いることになったという

きさつがある。しかし、翌年には両小学校は一つに統合され、結局 “The University Elementary School” を正式名称とした。ちなみに、シカゴ大学実験学校の歴史をまとめたアイダ・ディペンシアによれば、“The Laboratory School” という言い方は、1900年にエラ・フラッグ・ヤング (Ella Flag Young) がデューイ・スクールの指導主事 (supervisor) になったとき、彼女の発案でこの教師たちの間でそう呼ばれるようになったらしい。Ida B. DePencier, *The History of the Laboratory Schools: The University of Chicago 1896-1965* (Chicago: Quadrangle Books, 1967), p.36. ただし、既に1896年のおそらくは春にデューイが学校の継続を訴えてハーパー学長に書き送った文書のタイトルでは “Laboratory School” という言葉が使われている。John Dewey, “The Need for a Laboratory School,” *Early Works of John Dewey*, vol. 5 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1972), pp.433-435. 他方 “The Experimental School” という言い方は、以前から一般の人々の間でそう呼ばれていたらしい。デューイはこの呼称についてややとまどいながらこう述べている。「当校はしばしば実験学校 (experimental school) と呼ばれているが、ある意味ではそれは当を得た名称である。しかし、私はそれをあまり多用したくない。というのは、当校は子どもたちを実験にかけていると親たちが考えて、当然のことながらそれに反対をするということになるかもしれないと心配するからである。しかし、当校はやはり教育と教育上の諸問題にかかわる実験学校である——少なくとも私はそうでありたいと望んでいる。」 John Dewey, “Three Years of the University Elementary School,” p.61.

- 4) John Dewey, “The University Elementary School: History and Character,” *University Record*, The University of Chicago, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, p.72, *Middle Works* 1, p.325.
- 5) “The Model School,” *University of Chicago Weekly*, 16 January 1896, p.707. ここに報告されている開校初日の子どもたちの活動内容は、デューイが開校前に私的に印刷した「大学附属小学校組織計画」の中の最初の2ヶ月の授業プログラム案にある項目と符合している。すなわち、この案の「1月-第2週」の最初に「校舎と敷地の調査、なされるべき仕事の指示」、5番目に「厚紙の箱を作る」がある。John Dewey, “Plan of Organization of the University Primary School,” (1895?) *Early Works* 5, p.241. なお、身体教育を担当したアンダーソンに関して、デューイは次のように述べている。「当校は健康問題について特別な注意を払っている。子どもたちは大学の体育館を利用することができ、女子体育科のアンダーソン嬢の指導を受けている。彼女は、子ども一人一人の身体状況についても注意深い研究をおこなっている。」 John Dewey, “The University School,” *University Record*, The University of Chicago, vol. 1, no.32, November 6, 1896, p.417, *Early Works* 5, p.436.
- 6) Katherine Camp Mayhew & Anna Camp Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago, 1896-1903* (New York: Appleton Century Company, 1936), pp. 7-8.
- 7) キンバーク街5718番地には今も住宅が建っている。棟割りの2軒続きの建物の一方で、小住宅である。
- 8) Dewey, “The University School,” in *University Record*, vol. 1, no.32, November 6, 1896, p.417, *Early Works* 5, p.436; John Dewey, “The University Elementary School: History and Character,” in *University Record*, The University of Chicago, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, p.72, *Middle Works* 1, p.325; Mayhew & Edwards, op. cit., p. 8; DePencier, *The History of the Laboratory Schools*, p.26, 参照。なお、1899年2月にデューイが学校の父母会の会合でおこなった講演「大学附属小学校の3年間」では、キンバーク街当時の生徒の人数は25名となっているが、これは何かの間違いであろう。Dewey, “Three Years of the University Elementary School,” p.57.
- 9) Mayhew & Edwards, op. cit., p. vii, 参照。
- 10) ロサリー・コートは現在ハーパー街 (Harper Avenue) の一部となっている。サウス・パーク・クラブハウスの建物は今はなく、ハーパー街と57番街との角は本屋になっている。
- 11) “School Record, Notes, and Plan: The University of Chicago School, X,” *University Record*, vol. 1, no. 41, January 8, 1897, p.519.
- 12) Dewey, “The University Elementary School: History and Character,” *University Record*, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, *Middle Works* 1, p.325. 参照。また、DePencier, op. cit., p.26, も参照。
- 13) DePencier, op. cit., pp.26-27; Dewey, “The University Elementary School: History and Character,” *University Record*, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, p.72, *Middle Works* 1, p.325; Dewey, “Three Years of the University Elementary School,” *Middle Works* 1, p.57, 参照。

- 14) Dewey, "The University Elementary School: History and Character," *University Record*, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, *Middle Works* 1, p.325, 参照。
- 15) "The University Elementary School," *University Record*, The University of Chicago, vol. 2, no.26, September 24, 1897, p.210.
- 16) Depencier, *op. cit.*, p.27, 参照。後にデューイは「[1897年] 1月にロサリー・コートに移転して、広い敷地に40名の子どもを受け入れることができるようになった。次年度[1897年10月開始]には60名に増加したが、学校はロサリー・コートにとどまっていた」と述べ、ロサリー・コートもすぐに手狭になったことを示唆している。Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, p.57.
- 17) "The New Building," *University Record*, The University of Chicago, vol. 3, no.12, June 17, 1898, p.70.
- 18) "The University Elementary School," *University Record*, The University of Chicago, vol. 3, no.29, October 14, 1898, p.176; Mayhew & Edwards, *op. cit.*, p. 8. ただし、理科の実験室について、メイヒュー=エドワーズは2部屋(物理・化学用と生物用)としている。
- 19) John Dewey, "The University Elementary School: General Outline of Scheme of Work," in *University Record*, The University of Chicago, vol. 3, no.40, December 30, 1898, p.253, *Middle Works* 1, p.336. ただし、デューイ・スクールでは復唱室は生徒と教師が経験や疑問や考えを自由に交換する一種の集会室ないしは談話室として機能していた。
- 20) 1899年2月の時点でも、デューイは「われわれは自前の建物と敷地をもつまではここにいたいと思っている」と述べている。Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, p.57. また、デューイが学長に提出した1898-99年度の大学附属小学校に関する報告書では「当校の主要な要求項目」の一つ目に「当校の使用のために特別に設計され、構成され、装備された建物」をあげている。そして、物理的な諸条件の不備によって教育上の諸原理や諸理論の実験的な研究が妨げられてはならないと訴えている。John Dewey, "The University Elementary School," in *The President's Report: July 1898-July 1899*, The University of Chicago, 1900, p.199, *Middle Works* 1, p.320. さらに1900年12月の論文でデューイは「資金不足による学校の運営上の困難」として「適切な建物と設備が得られていないこと」および「教師たちに十分な俸給を支払えないこと」の2点をあげ、このままの状態では実験を続けることがよいかどうか重大な問題になりつつあると記している。John Dewey, "The Psychology of the Elementary Curriculum," *Elementary School Record*, no. 9 (Chicago: The University of Chicago Press, 1900), *Middle Works* 1, p.73. デューイ・スクールはついに自前の建物をもつことはなかった。最終的には、次のような経緯によってデューイ・スクールの校舎建築問題は解消された。1901年にフランシス・パーカーのシカゴ教員養成学院(The Chicago Institute)がシカゴ大学に教育学部(School of Education)として編入され、1902年にパーカーの死去にともなってデューイが教育学部長となり、教育学部の附属小学校(実習学校)と教育学科(Department of Education)の附属小学校(実験学校)が形式的に合併し、さらに1903年に教育学部専用の建物としてエモンズ・ブレイン・ホール(Emmons Blain Hall)が完成して、そこに両校が一緒に入ることで名実ともに一つの大学附属小学校となる。
- 21) "The New Building," *University Record*, vol. 3, no.12, June 17, 1898, p.70.
- 22) John Dewey, "The University Elementary School: General Outline of scheme of Work," in *University Record*, The University of Chicago, vol. 3, no.40, December 30, 1898, p.54, *Middle Works* 1, p.337; Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, p.57; Dewey, "The University Elementary School," in *The President's Report: July 1898-July 1899*, p.198, *Middle Works* 1, p.317; DePencier, *The History of Laboratory Schools*, p.27.
- 23) "The University Elementary School," *University Record*, vol. 3, no.29, October 14, 1898, p.176. この記事の中で「4～5才児部門にはまだ余裕があり、さらに12名受け入れることができる」と記されていることから、当初4～5才児部門には数名の入学者しかいなかったと思われる。
- 24) Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, p.57; Dewey, "The University Elementary School," in *The President's Report: July 1898-July 1899*, p.198, *Middle Works* 1, p.317; DePencier, *The History of Laboratory Schools*, p.27, 参照。デイベンシアはここで

専任教師12名としている。

- 25) Mayhew & Edwards, *The Dewey School*, p. 8.
- 26) Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, p.66. なお, 中等段階を設けることについては, 学校開設の当初から考えられていた。デューイは, 1896年のおそらくは6月にハーバー学長宛に書いた学校継続の嘆願書で「学校はできるかぎり早急にカレッジへの準備に至るまでの全期間をおおところまで成長すべきである」と主張していた。John Dewey, "The Need for a Laboratory School," *Early Works* 5, p.434. また, 1897年5月の時点で, デューイは「大学附属学校(The University School)は初等と中等を含むことになるだろう」が, 「いまのところ中等段階の教育は提供されていない」と述べていた。Dewey, "The University Elementary School: History and Character," in *University Record*, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, p., *Middle Works* 1, p.330.
- 27) Mayhew & Edwards, *The Dewey School*, p. 8.
- 28) デューイの言う「オキュベーション」というのは, 子どもが全身全霊で打ち込む制作活動のことである。デューイ・スクールでは, 具体的には「料理」「裁縫」「木工」「織物」がおこなわれた。それらは, 衣・食・住にかかわる人間の最も基本的な生産活動を再現するものであり, 人間の社会生活を構成する最も原初的な要素と考えられたので「社会的オキュベーション」と呼ばれた。
- 29) Dewey, "The University Elementary School," in *The President's Report: July 1898-July 1899*, p., *Middle Works* 1, p.318.
- 30) *Ibid.*, *The President's Report*., p., *Middle Works* 1, pp.318, 319.
- 31) *Ibid.*, *The President's Report*., p., *Middle Works* 1, p.319.
- 32) *The Elementary School Record*, A Series of Nine Monographs, (Chicago: The University of Chicago Press, 1900)
- 33) Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, pp.57-66.
- 34) John Dewey, *The School and Society* (Chicago: The University of Chicago Press, 1900), 初版では三連続講演に加えて「大学附属小学校の3年間」を載せていたが, 1915年の第2版では「大学付属小学校の3年間」は削除され, デューイが『小学校記録』(*Elementary School Record*)に書いた諸論文を新たに加えている。岩波文庫の邦訳はこの第2版を訳したものである。
- 35) John Dewey, "A Pedagogical Experiment," *Kindergarten Magazine*, vol. 8, June 1896, *Early Works*, vol. 5, p.246.
- 36) DePencier, *The Dewey School*, p.36.
- 37) Harriet A. Farrand, "Dr. Dewey's University Elementary School," *Journal of Education*, vol.48, no.10, September 1898, p.172.
- 38) *Ibid.*, p.172.
- 39) *Ibid.*, p.172.
- 40) DePencier, *op. cit.*, p.35. これは1910年12月にフランシス・ウェイランド・パーカー・スクールの校長フローラ・クック(Flora J. Cooke)が父母会でおこなった報告の一部である。
- 41) 附属小学校の財政健全化のために授業料値上げとクラス規模の拡大を求めるハーバー学長の提案に対して, デューイは1898年6月23日付けの手紙で授業料値上げは受け入れたが, クラス規模拡大は次のような理由を記して断固拒絶した。「クラス規模に関してですが, わたしは先日申し上げたことを繰り返すだけです。クラス規模の問題はこれまでもずっと最大の注意が払われてきたし, いまやそれは原理の問題であって, 瑣末などでもよいことではないのです。ただ単に収入を増やすためだけにクラス規模を拡大しなければならぬとしたら, それは当校の理念と方法とを完全に変えるということであり, 当校の性格全体を変えてしまうほどの深刻な影響を及ぼすことになるでしょう。つまり, 当校が実験学校として保持している存在意義そのものが, いまやいっさい失われることになるということなのです。」Dewey to Harper, June 23, 1898, cited from Arthur G. Wirth, *John Dewey as Educator: His Design for Work in Education, 1894-1904* (Huntington, New York: Robert E. Krieger Publishing Company, 1979), p.70.
- 42) Dewey, "Three Years of the University Elementary School," *Middle Works* 1, p.66.
- 43) *Ibid.*, p.66.
- 44) *Ibid.*, p.66.



- 45) Dewey, *The School and Society, Middle Works* 1, p.35. (宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫, 61-62.)
- 46) Farrand, op. cit.,p.172.
- 47) Farrand, op. cit.,p.172.
- 48) Dewey, "Three Years of the University Elementary School," p.66.
- 49) Farrand, op. cit.,p.172.
- 50) Dewey, *The School and Society, Middle Works* 1, pp.21 22. (宮原訳, p.42.)
- 51) *Ibid.*,pp.49,52. (宮原訳,pp.83,89.)
- 52) *Ibid.*,p.22. (宮原訳,p.43.)
- 53) *Ibid.*,p.48. (宮原訳,p.82.)
- 54) *Ibid.*,p.55. (宮原訳,p.94.)
- 55) *Ibid.*,p.56. (宮原訳,p.95.)
- 56) Dewey, *The School and Society, Middle Works* 1, pp.37, 44. (宮原訳,pp.70,77.)
- 57) 註25, 参照。
- 58) John Dewey, "The Theory of Chicago Experiment," in Mayhew & Edwards, *The Dewey School* (1936), pp.464-465, also in *Middle Works of John Dewey*, vol.11 (Carbondale: Southern Illinois University Press, 19), pp.203-204.
- 59) Dewey, *The School and Society, Middle Works* 1, p.68. (宮原訳, pp.98-99.)
- 60) *Ibid.*,p.68. (宮原訳, pp.98.)
- 61) デューイが示した発達段階の説明については次を参照。Dewey, "The University Elementary School: History and Charactor," *University Record*, vol.2, no.8, May 21, 1897, p., *Middle Works* 1, pp. 331-332; "The University Elementary School: General Outline of Scheme of Work," *University Record*, vol. 3, no. 40, December 30, 1898, p., *Middle Works* 1, pp.337-338; *The School and Society, Middle Works* 1, pp.73-80.
- 62) 一説によれば「1896-97年度にシカゴ大学と提携または協力関係にあったのは、11の州の約12の私立アカデミーと54の公立ハイスクールであった。」Robert L. McCaul, "Dewey's Chicago," *The School Review*, Summer 1959, p.263.
- 63) Harper to E. A. Turner, August 15, 1899, cited in McCaul, op. cit., p.267.
- 64) McCaul, op. cit., pp.262. 263-264, 273. また, 次も参照。Arthur G. Wirth, *John Dewey as Educator*, pp.35, 46-47.
- 65) Dewey, "The Significance of the School of Education," *Middle Works* 3, pp.276-277
- 66) Laura L. Runyon, "A Day with the New Education," *The Shataguan*, vol.30, no.6, March 1900, p.592.